

## 第2回42会報告 (07年4月14日) . . . 同15日WHCML掲載文

昨年2月に卒業以来39年目にして初めて開いた昭和42年卒の同期会には、16名が新宿に集まったが、その折りに出た「来年もやろうよ(やってよ?)」という声と「もう少し暖かい時季のほうが」という意見を踏まえて、今年は4月に浅草で開催しようと、2月1日の21時にご案内のメールを送ったところ、待ってましたといわんばかりにその晩のうちに5名、翌日には4名の出席返信が届くという反応の速さに先ず驚き、次いで開封や返信の時刻が(午前)1時、3時、6時、8時 . . . 14時 . . . 22時と、同期生の誰かが一日のいずれかの時間にパソコンと向き合っている姿を想像していささかゾットするとともに、改めて仲間の健在ぶりを知ることができ、再会の期待が愈々高まって迎えた昨日・4月14日、土曜日、夜来の風雨も止んで初夏を思わせるまばゆいばかりの太陽が中天に達した正午、浅草(正確には吾妻橋を渡った隅田川の対岸)のアサヒビールタワー22階の「ラ・ラナリータ」に集まったのは、連続参加の山口(赤坂)、荒木、植村、大竹、岡林、小関(唐木)、小坂、徳淵、新妻、西海、花田、縹(日向寺)、皆川、五十嵐の14名に、初参加組では現役山女の菅原(猪間)、故郷・日光に在住の田上、上越・高田から駆けつけた布施の3名を加えた合計17名で、一方、前回参加の佐々木、萩原(柳)と、長期間の行方不明状態を経て岐阜県多治見市での棲息が確認された石川の3名からは、やむを得ず欠席で誠に残念との思いを込めたメッセージが寄せられ、この「42会」産みの母・縹の開会宣言、我らが代の幹事長・布施の発声による乾杯で始まったイタリアン料理の宴は、窓の外に広がるナイスビューには一瞥を与えたのみで、飲み放題のビール、ワイン、ウイスキーなどに促されて、それぞれが順繰り披露する思い出話や近況報告で、あたかも眼下に見下ろす川岸に散り残る桜の花びらが飛んできたかのように話の花が部屋一杯に咲き、かつ飲むほどに酔うほどに舞い乱れ、その様子的一端は間もなく西海がメーリングリストに貼る画像で見ることができようが、楽しく賑やかなうちに、予定の3時間が経過しても全く収まることを知らず、そのまま全員が同じフロアの喫茶ルームに移動して一室を占領してからというもの、さらに大声や笑い声が飛び交い、7月にやろうという北アルプス夏合宿から政治経済へと話題が大きく広がり、また健康、年金、髪の毛の濃淡や黒白、我が息子や娘に関する身近な問題に戻り、コーヒー・紅茶にお冷やだけのオーダーで、この報告文のように途切れることなく延々と続いてここでも3時間、最も遠い神戸からやって来た徳淵の音頭により一本締めをし、来春の再会を誓い合っただけで散会したときには、喫茶ルームの窓から遠く望む丹沢、富士山から右に連なる奥多摩、奥武蔵の山なみに夕日が沈もうとしておりました。